

食品安全のリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ概要

英文名称：

International Workshop on Risk Communication in the Field of Food Safety

開催日時：

平成 17 年 1 月 26 日（水）～ 28 日（金）

開催場所：

内閣府食品安全委員会事務局 中会議室（ブルデンシャルタワー7 階）

出席者等：

別紙 1 参照

開催趣旨：

現在、リスクコミュニケーション専門調査会において審議調査中のリスクコミュニケーションの効果的な手法等についての検討を更に深めるため、「現状と課題」を紹介しつつ、カナダ及びオランダ、日本の各国有識者・担当者が一堂に会した国際ワークショップを開催し、その結果をリスクコミュニケーション専門調査会における調査審議に資する。

会議概要：

別紙 2 のプログラムに基づいて実施された。

別紙 3 の各事項について活発な議論があった。

別紙 4 のような発言があった。

International Workshop on Risk Communication in the Field of Food Safety

List of Participants

(食品安全におけるリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ出席者リスト)

Participants of the Workshop (ワークショップ参加者)

< Canada > (カナダ)

- Ms. Sandra Lavigne サンドラ ラヴィーン
Executive Director - Public Affairs, Canadian Food Inspection Agency
カナダ食品検査庁 広報部長
- Mr. Steve Malcolm スティーブ マルコム
Special Advisor to the Director General, Food Directorate, Health Products and Food Branch,
Health Canada
カナダ保健省 スペシャルアドバイザー

< the Netherlands > (オランダ)

- Ms. Irene E. van Geest-Jacobs イレーネ E ファン・ヘーステ - ヤコブ
Director of Communication and Information, The Dutch Food and Consumer Product Safety
Authority
オランダ食品・消費者・製品安全機関 コミュニケーション・情報部長

< Japan >

- Prof. Shoji Tsuchida 土田 昭司
Professor, Department of Psychology, Faculty of Sociology, Kansai University
関西大学社会学部社会学科 産業心理学専攻 教授
- Mr. Masamichi Saigo 西郷 正道
Director, Risk Communication, Food Safety Commission, Cabinet Office, Japan
内閣府食品安全委員会事務局 リスクコミュニケーション官

[司会者]

- Dr. Rhohei Kada (Coordinator) 嘉田 良平
Adviser & Principal of Policy Research & Consulting Division, UFJ Institute Ltd.
(株)UFJ 総合研究所 顧問、放送大学客員教授、女子栄養大学客員教授

Observer

- Canadian Embassy カナダ大使館
- Dutch Embassy オランダ大使館
- Commissioners of Food Safety Commission 食品安全委員会委員
- Members of Risk Communication Expert Committee, Food Safety Commission
 リスクコミュニケーション専門調査会専門委員
- Ministry of Health, Labor and Welfare, Japan 厚生労働省
- Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, Japan 農林水産省
- Food Safety Commission Secretariat 食品安全委員会事務局

(参考)

各国有識者・担当者略歴

(カナダ)

- サンドラ ラヴィーン (Ms. Sandra Lavigne)
カナダ食品検査庁 広報部長
(Executive Director - Public Affairs, Canadian Food Inspection Agency)
トロント大学経営管理学修士課程修了。カナダ保健省、カナダ食品検査庁等に勤務し、カナダにおける BSE および鳥インフルエンザ発生時のリスクコミュニケーションに広報部長として尽力した。行政機関におけるコミュニケーション業務に20年以上のキャリアを持ち、公共サービス賞等受賞多数。
- スティーブ マルコム (Mr. Steve Malcolm)
カナダ保健省 スペシャルアドバイザー
(Special Advisor to the Director General, Food Directorate, Health Products and Food Branch, Health Canada)
ゲルフ大学生物統計学修士修了。生物統計学専門家としてカナダ保健省で食品安全に関するリスクコミュニケーション業務に26年間従事している。現在は食品に関するリスクコミュニケーションシステム制作の統括としても活躍。2003年のBSE発生時にカナダ保健省の対応に貢献し、また、その評価に基づき、リスクコミュニケーションを行った。

(オランダ)

- イレーネ E ファン ゲーステ - ヤコブ
(Ms. Irene E. van Geest-Jacobs)
オランダ食品・消費者・製品安全機関 コミュニケーション・情報部長
(Director of Communication and Information, The Dutch Food and Consumer Product Safety Authority)
ナイメーヘン大学卒業。オランダ文学およびコミュニケーション・社会心理学専攻。高校のオランダ語教師を経て、非営利団体およびブレダ市に勤務し、緊急時におけるコミュニケーションやロビー活動策等を担当する。96年より保健福祉運動省に勤務し、主に食品安全に関するリスクコミュニケーションに尽力している。また、欧州食品安全機関でリスクコミュニケーション発展のため、特に科学的知見と現実的な実行性についてプロジェクトを進めている。

(日本)

- 土田 昭司
関西大学社会学部社会学科(産業心理学専攻) 教授
1957年山形県生まれ。関西大学社会学部社会学科教授。1986年東京大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程博士課程単位取得満期退学。明治大学文学部助教授等を経て1997年から関西大学教授。日本社会心理学会、日本リスク研究学会等に所属。リスクに対する意思決定プロセスを社会心理学の立場からリスク認知研究はあるいはリスクコミュニケーション研究として実践している。具体的には、科学技術の社会的需要や消費行動におけるリスク意思決定研究を行っている。

食品安全のリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ

プログラム

日時

平成17年1月26日(水)～28日(金)

場所

内閣府食品安全委員会事務局 中会議室(ブルデンシャルタワー7階)

プログラム

平成17年1月26日(水) ワークショップ事前ミーティング 15:00-17:00

- | | |
|-------------|--|
| 15:20-15:40 | ワークショップの進め方について説明 |
| 15:40-17:00 | 食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションへの取り組み
と今後の課題～「食の安全に関するリスクコミュニケーション
の現状と課題」について～(食品安全委員会) |

平成17年1月27日(木) ワークショップ1日目 9:30-11:40, 13:30-18:00

1日目午前 第1セッション 欧米諸国に学ぶ 9:30-11:40

- | | |
|------------|---|
| 9:30-9:40 | 開催者挨拶(食品安全委員会 事務局長) |
| 9:40-11:20 | 海外有識者(カナダ)の報告(Ms. Sandra Lavigne、Mr. Steve Malcolm)
“A Case Study in Risk and Crisis Communications: Canada’s Response to BSE” |

1日目午後 第1セッション 欧米諸国に学ぶ(続) 13:30-14:50

- | | |
|-------------|---|
| 13:30-14:50 | 海外有識者(オランダ)の報告(Ms. Irene E. van Geest-Jacobs) |
| 14:50-15:00 | 小休憩 |

第2セッション 日本の課題を点検する 15:00-15:50

- 15:00-15:50 日本有識者からの報告（土田教授）
“ Basic concepts of risk communication: An social psychological approach ”
- 15:50-16:20 休憩
- 16:20-16:35 第1・第2セッションのまとめと総合討論の進め方・主要議題について
- 16:35-17:30 総合討論（論点整理）

平成17年1月28日（金）ワークショップ2日目 9:30-11:40, 13:30-16:30

2日目午前 第3セッション 日本へのアドバイス等 パート1（案だし）

9:30-12:30

- 9:30-9:45 1日目の整理
- 9:45-10:45 有識者からのアドバイス等 ディスカッション
- 10:45-11:15 休憩
- 11:15-12:30 提言に向けての意見交換

2日目午後 第3セッション 日本へのアドバイス等 パート2（とりまとめ）

14:30-16:30

- 14:30-15:30 アドバイス等とりまとめ
- 15:30-16:00 休憩
- 16:00-16:20 ワークショップの総括
- 16:20-16:30 閉会挨拶（食品安全委員会 寺田委員長）

平成 17 年 1 月 28 日 (金)

国際ワークショップにおける主要テーマ

- 我が国における効果的なリスクコミュニケーションシステムの構築のために何が重要か？ -

1. 信頼

「信頼」は効果的なリスクコミュニケーションを図るため、最低限、根本的に欠かせない要素である。

どのように、消費者の認識（所与、バックグラウンド）を捉え、彼らとの信頼関係を築くべきか？

- ・ 変えることができない各国固有の背景（例：文化的要因、歴史的要因、自然環境）
- ・ 変えることが可能な各国の背景

2. 評価

リスクコミュニケーションの目標は何か？

- ・ 理解度
- ・ 信頼度
- ・ モニタリング

3. 手法

1) 資料（正確性、迅速性、理解しやすさ）

- ・ 教育
- ・ パンフレット

2) 消費者とは誰か？

3) サイレントマジョリティー：彼らの認識をどのように捉え、情報を提供し、意見を収集するか。

4) タイミング

5) 事前準備

6) システム

- ・ 人材
- ・ 組織
- ・ コミュニケーター育成プログラム

4. 国際協力

国際的な意見や情報の交換によってリスクコミュニケーションを促進する。

被害を回避するために各国の相互理解のための新たなシステム構築が必要不可欠。

Main discussion topics on the WS

What are the important points for effective risk communication system?

1.Trust

Trust is the most fundamental factor for successful risk communication.

How do we build up consumers' trust by considering their background?

- Unchangeable background
- Changeable background

2.Evaluation

What is the goal of risk communication?

- The degree of understanding
- The degree of trust
- Monitoring

3.Methodology

- 1) Materials (should be correct, swift, and comprehensive)
 - Education
 - Brochures
- 2) Who are the consumers?
- 3) Silent majority ---How do we recognize and share information / consult with them?
- 4) Timing
- 5) Preparation
- 6) Systems
 - Human resources,
 - Organization,
 - Communicator training program

4. International Cooperation

Exchanging knowledge leads to frontiers of risk communication.

Necessity to structure a new system for mutual understanding among countries to avoid damage from risks.

食品安全のリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ における各国の主な発言 (速報版)

第1セッション 欧米諸国の経験に学ぶ

第2セッション 日本の課題を点検する

○効果的なリスクコミュニケーションについて

- ・科学的知識をわかりやすい言葉で人々に伝えるブリッジになることが重要である。リスクコミュニケーションにおいては、消費者は、消費者自身の“Rationality”を持っていて、こちらが正しい情報を提供しない時に“Emotional”になる。(オランダ)
- ・すべての関係者をできるだけ早くひきつけることが必要である。そのため、できるだけ早く対策をスタートすること、できるだけ多くの情報を収集し、ストーリーを構築することが必要。うわさが広まるまでに準備をしていかなければならない。(カナダ)
- ・BSEの発生前後で、国民の政府に対する信頼性は変化しなかった。リスクコミュニケーションだけでは信頼性は保てない。政策や情報に関する全体的なシステムに対する信頼性が大きく影響しているのではないか。(カナダ)

○リスクコミュニケーションのターゲットについて

- ・一般的な人たちをターゲットとしている。そのため、高校後期の人たちが理解できるぐらいの情報を提供している。(カナダ)

○コミュニケーターについて

- ・科学者がコミュニケーターであると同時にエバリュエーターである。HC(カナダ保健省)、CFIA(カナダ食品検査庁)のスポークスパーソンは、コミュニケーションの専門家ではなく、コミュニケーターとしてトレーニングを受けている科学者である。資料作成にはコミュニケーションアドバイザーが関わっている。コミュニケーターは、情報について、白黒はっきり言うが、科学者は科学的見地から説明するため白か黒かという点では明確ではない。しかし、80%ぐらいは人々の理解を得ている。(カナダ)

○情報提供のシステムについて

- ・夜間の情報提供ダイヤルは外注している。緊急時の勤務体制はローテーションを組んでいる。(カナダ)

○BSE、鳥インフルエンザ発生時の対応について

- ・BSEについては、英国や世界各国の経験からある程度のことになっており、自国で発生したときに備えて準備していた。科学者とリスクコミュニケーションの専門家が協力して素早く対応できた。(カナダ)
- ・自国で発生した時には、政府は既に知識、経験を共有していた。大使館を通じた国際的な情報の入手は大切である。(オランダ)

- ・鳥インフルエンザが発生した時には、卵や鶏肉を食べても感染しないと情報提供を行った。政府が安全であると言えば信用される。汚染地域に主たる鶏卵の生産地が含まれていたため、汚染地域外からの供給だけでは間に合わないため、信用されたということもあるのかもしれない。(オランダ)

○国際的な連携について

- ・ヨーロッパでは EU 全体の協調が不可欠である。安全性評価は EU の基準により判断される。各国の食品の安全性の評価、管理について EFSA(欧州食品安全機関)に報告する必要がある。EU の拡大に伴い、対話型行政に慣れていない新しい加盟国との連携が課題。(オランダ)

第3セッション 日本へのアドバイス等

○Trust (信頼性) について

- ・信頼性は食品の安全性に関するリスクコミュニケーションの再構築に欠かせない。信頼性は努力によって上げていくことが可能なバックグラウンドの1つである。(カナダ)
- ・政府と生産者・事業者、消費者との関係には、“confidence (信頼性、自信)”が必要。人々の Confidence は Trust を構築する上での助けになる。ただし、政府と生産者・事業者間の信頼性の構築は、施策決定の過程ではなく、合意形成の過程であると認識すべきである。(カナダ)
- ・政府はまず、何を目標とするかをはっきりさせなければならない。最も大切な目標は“人々の健康”である。(オランダ)
- ・何を目的に政策決定がされたのか、明快な回答をすること。また、どのような議論があったかも公開することが重要である。(オランダ)
- ・(日本では、あまり科学を信用しないということも一部に見られることについて)科学者をパネルディスカッションに招くことは重要だが、科学者にリスクコミュニケーション上の問題解決を期待してはいけない。(オランダ)

○“Silent Majority”について

- ・食品安全について特に関心が高いと言えないような消費者に意見交換会への出席を求めるのは容易ではない。世論調査によって、賛成・反対意見の割合を把握すること、トレーニングをした消費者カウンセラーを活用すること、何が消費者の主流な意見なのかを把握することなどが重要。(オランダ)
- ・食品の安全性について、雑誌やテレビの料理番組、冷蔵庫に貼り付ける磁石、特定な地域へのダイレクトメールキャンペーン、小冊子の配布などの各種広告を行っている。子供向けゲームやクイズを作成し、学校での使用、図書館への配置など、教育の分野ともパートナーシップを築いている。(カナダ)

○Evaluation (評価) について

- ・食品安全や消費者行動、信頼性に関するモニタリング、 毎年の統計調査、 1日の食料摂取量などの消費者調査、 特別なグループ(年配者、子供など)をターゲットとしたモニタリング、 5年毎の食習慣に関する調査、 3ヶ月ごとにメディアや報道の分析も行っている。(オランダ)

- ・ 食品安全や特別な項目等の意見調査、世論調査、電話等による定期的なフォーカスグループテストを実施している。(カナダ)
- ・ 世論調査では、消費者の不安や恐怖要因を、フォーカスグループテストでは理解度、広告効果を調べている。(カナダ)
- ・ 消費者行動の変化が結果として現れてくるのは、後になってからである。結果の要因を考え、何に基づいて行われたのかを考えなければならない。(オランダ)
- ・ 報道機関からの電話、ウェブサイトへのアクセス、問い合わせ電話数なども評価の対象となる。(カナダ)

○リスクコミュニケーションの方法論について

- ・ EFSA では、リスクコミュニケーションのためのトレーニングを行っている。評価機関とも連携しリスクコミュニケーショントレーニングを進めている。(オランダ)
- ・ トレーニングではシミュレーションを行い練習する。(カナダ)
- ・ 速やかな情報伝達のために、すぐに立ち上げられるようなウェブサイトも用意している。(オランダ)
- ・ ウェブサイトのフロントページにヘッドラインを設け、リンクで各機関等の追加情報も調べられるようになっている。(カナダ)
- ・ ウェブサイトの使用性について3ヶ月ごとに評価している。(オランダ)

○国際協力について

- ・ ネットワークを維持していくことが必要。(カナダ)
- ・ 現在 EU においても国際協力について努力しており、さまざまなワークショップを EFSA でも主催している。今後、カナダ、日本にも参加してもらえようにしたい。(オランダ)
- ・ カナダ保健省でもリスク分析ワークショップを予定しており、日本、オランダ両政府からも参加してもらいたい。(カナダ)
- ・ 各国の消費者間の話し合い、相互理解をする場を設けることも大切ではないか。(日本)
- ・ 日本・カナダ首脳会合においても、食品安全分野の協力を深めていくことがアナウンスされ、両国におけるリスクコミュニケーションについても協調、協力を図っていきたい。(カナダ)